資料３

なぜわたしがこの絵本をつくったか

マイケル・ホール（Michael・Hall）

たいてい私は、絵本を創りはじめてかなり時間がたたないと、その本がなにを意味するのかを考えたりはしません。おもしろい形や言葉を並べ、遊びながら、自然にそれらが何かを表現するのを発見しようとするのです。『レッド』は、クレヨンのラベルの色と実際の色がちがっていたら思いもつかないことがあれこれ起きるだろう、と思って書きはじめました。でも「あまり赤くないね」「もっと努力しなくちゃ」といったクレヨンたちのセリフを書いていくうちに、私の中から過去に投げかけられた声が聞こえ始め、「これは自分自身の物語でもある」と気づいたのです。というのは、私には読字障害があるからです。

赤いラベルを貼られた「レッド」は、どれだけうまく赤いものを描けるかということで、自分の能力を決めていました。周りの人たちは、助けようとしてできるかぎりのことをしました。でも、だれもラベルの向こう側を見ることができません。そのせいで、みんなの言動は状況を悪くするだけでした。これは、私たちが互いに傷つけあってしまうのは意地悪な気持ちからではなく、単に無知によるものだということを表しています。

この本が、人を外見で判断することや、だれにでも長所と弱点があるということ、自分自身に正直であることがどれほど重要かなどについて、話し合うきっかけになってくれればと思います。読者には、子どもにまちがったラベルが貼られているかもしれないこと、子どもを失敗ではなく成功によってだけ判断しようとすることや、自分の居場所を見つけることの大いなる喜びについて、考えを巡らせていただければと願っています。（上田勢子訳・抜粋）

★この絵本を見つけた時うれしくなりました。アメリカでは「多様性」についての本がたくさんありますが、この絵本はクレヨンの色で多様性を表現するというアイディアが抜群です。多様な色の中で、ラベルに縛られず自分の本当の色に気づけるように、日本の子どもたちにこの本を届けたいと思います。
（上田勢子、本書訳者・アメリカ在住）

★「幼い人は、すんなりわかる。いっしょに読みながら、痛みを感じるオトナが、たくさんいますように。」（金井景子、早稲田大学教育学部教授・ジェンダー学）

★シンプルで楽しい幼児絵本。子どもたちには最初からこの子が青だとわかるので、他のクレヨンのまちがった思い込みにツッコミを入れながら読んで、最後は喝采。子どもがレッドの味方をしていっしょに楽しめば、それでＯＫ。
（ひこ・田中、作家・評論家）

★外面だけで思い込んでしまうことっていっぱいあります。でも大事なのは、本人が自分の色を大切にすること。一人一人が自分の色に気づけばみんな生きやすくなるはずです。（高橋れん、ＦＴＭの青年）

★外見と中身が違う違和感は、大なり小なり誰にでもある。その息苦しさと、そこから本人も周囲も解放される喜びが描かれている。これは、私とあなたの物語。（草谷桂子、作家・子ども文庫主宰）

★クレヨンの絵が素朴で好き、パープルってやさしいね、さいごがすごいと思った。（11 歳女子）

★レッドの個性がわかる友だちがいてよかったと思った。（11 歳男子）

★「みんな違ってみんないい」ではすくいきれない問題と解決法が、こんなにシンプルに表現できてしまうなんて！　絵本の力を語るときに、取り上げる本がまた増えました。（西山利佳、評論家・青山学院女子短期大学准教授）

★本当の自分を認めてもらえるって、なんてすてきなんだろう！　心と体の不一致に悩む子どもたちの救いになれば、また、理解するきっかけになればいいと思う。子を持つ親として、大人になるまでに真面目に理解してほしいので、ぜひ、小中学校で取り上げてもらいたい。（田中結花、ジュンク堂書店上本町店）

★周りの皆が最初からありのままのレッドを認めてあげていれば、何も苦しむことはなかったでしょう。良かれと思ってしているアドバイスや助けがレッドを追い詰めていたと思います。周りの理想と希望を叶えるために生きているのではないのです。自分自身、ありのままに、幸せになるために生きてほしい。全ての子どもたちへ。（岸朋子、大垣書店イオンモールＫＹＯＴＯ店）